

みんなが同じ場にいる意味

—誕生の予感—



【陸前高田教育支援チーム「まつ」発足】

学校支援を目的とした現地 NPO の設立に向けて、11月7日、教育支援チーム「まつ」が、陸前高田市が立ち上がりました。代表を引き受けてくださったのは、鈴木正彦先生、副代表には佐々木善仁先生、菅野祥一郎先生、会計は及川久子先生で、いずれの先生方も陸前高田市内で教鞭をとられた経験をお持ちの退職教員の先生方です。連絡担当は、臼井美穂さん（陸前たがだ八起プロジェクト）にお願いできました。

7日の16:30から行った立ち上げ会では、3月11日の震災以後の Ed.ベンチャーの支援の概要を説明し、今後の課題となっている事柄についての提案を行いました。第1には、支援に関わる助成金の確保が被災地外からでは難しくなっており、継続的な支援のためには、被災地の団体による支援が必要であることです。もちろん、既に各学校ともに支援が必要でないという状態になっているならば問題はないのですが、現在でも、虫ピン、チョーク、トナー、紙…と、消耗品を中心とした継続的な支援が必要な状態です。第2には、震災の影響を受けている子どもたちには長期的な支援が必要であるということです。子どもたちへの震災の影響とは決して一時的なものではなく、親を失う、家を失うという状況に対して、その子どもなりの乗り越え方があると思われまます。そのため、学校段階を越えて見守る必要があるというだけでなく、時には「乗り越えた」と思っていたその先で影響が出てくるということも考えられます。加えて、岩手県のような広域人事異動の仕組みをもっている自治体では、震災当時は管外から異動で陸前高田市に勤務していたが、今春は異動せざるを得ないという先生方もおり、異動について「後ろ髪を引かれる想い」を繰り返し話されておられました。そうした想いと子どもたちをつなげるためにも、教育に特化した地元の団体が必要であることもお話させていただきました。

お集まりいただいた4人の先生方には、私たちの提案に熱心に耳を傾けていただき趣旨にご同意いただきました。その上で、役割分担を決定し、団体の名前を考えました。陸前高田をイメージできる言葉で、教育に関係する言葉。いろいろなアイデアが出る中で、陸前高田を象徴する高田松原の「松」、震災後に一本だけ残った一本松の「松」にちなみ、一方で、復興を「待つ」、子どもたちを「待つ」、先生たちを「待つ」という教育の受け皿としての意味を含んで「まつ」が決まりました。ゆっくりでいい、でも、確実に、前に向かって進む、その営みをずっと見守りながら「まつ」、そんな団体にしたいという想いが「まつ」には込められました。

教育支援チーム「まつ」の最初の取り組みは、次年度の学校のニーズを把握するために、12月末に連絡協議会を行うため、チームの趣旨の説明と参加の依頼を各学校に行うことになりました。今後は、教育支援チーム「まつ」の取り組みも、お知らせしていきたいと思ひます。



【鬼ごっこと檻の中の病気ライオン・・・支援と日常の交錯】

11月5日未明、万石浦サポートセンターに到着。前日夜に入った2人のメンバーで遠足用のおにぎり弁当30人分が作られ、Ed.ベンチャーが支援物品として入れた下駄箱の上に積まれているのが真っ先に目に入りました。総勢14名での打ち合わせをさっそく行います。明日の流れを確認。バスでの遠足とはいっても、支援スタッフの誰もが初めて行くところです。事故がないように・・・、緊急事態の対応も決めます。支援スタッフと子どものペアリングも考えます。そんな話をしながら子どもたち一人ひとりの顔が浮かんできます。先月別れた後、子どもたちから4回の電話をもらいました。「〇〇は行けないみたいだよ」「絶対来るよね、パソコン持ってきてよ」。少し不安な気持ちを持ちながら、打ち合わせを終えて寝袋で雑魚寝です。

当日の朝、空はどんよりとしていますが心配された天気も何とかもちそう。集合時間よりみんな早く集まって、学活やお弁当もらってバスに乗車。子どもたちは楽しそうにしながら、妙にはしゃぐこともなく、とても落ち着いている感じ。



バスが市内を抜けるとき、目の前には津波で被災した家々がひろがっています。瓦礫はほとんど撤去されていますが、被災した家々が骨組みを見せながら立ち並んでいます。その光景を見て、子どもたちがそれぞれに大人たちに話し始めました。

「あの大きな缶詰の形をした広告は、鮎川の方から津波で流されてきたんだよ」

「僕のおばあちゃんは流されたけど、あの屋根に穴が開いている家に捕まって助かったんだ。ここまで流されてきたんだ。」

「工場の引き込み線がやられて、それで工場の再開がずいぶん遅れているんだ」

いままであまり津波のことは言葉にしてこなかった子どもたち。私たちもあえて言葉にすることは求めてきませんでした。それよりもじっくりと内側に力をためて、やがて子どもたち自らが言葉にしていく「とき」を待つことを私たちは選択していました。そうした「とき」がやがて訪れることを感じさせる出来事でした。それはみんなが同じ場を共有し、そこに「いる」ことをお互いが受け入れているからこそ生まれてくる可能性なのかもしれません。

仙台空港見学→松島でお弁当→水族館見学と、遠足は順調でした。でも、今回子どもたちに一番人気だったのは、松島の広場での「鬼ごっこ」でした。子どもたちも、若いスタッフたちも、走り回って、走り回って、走り回って・・・。へとへとになっていても、「もう1回やろう」と口々に言います。普段外遊びにあまり参加しない女の子も、「またやりたい～」。みんなが同じ場所で楽しんでいる姿が、今まで見たことがないくらいにあまりにも「自然」で、見ていてクツクツと笑いがわき上がってきました。

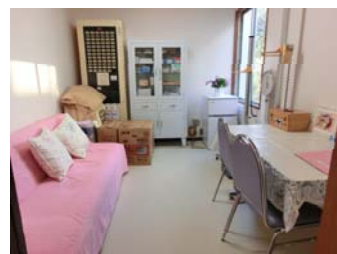
日曜日は、小学校の授業参観とバザーが午前中に行われました。遠足で見せてくれた子どもたちの生き生きとした表情をイメージして授業中の教室を覗いたのですが、残念なことにそこで見たのは、ライオン隊の子どもの多くが、固い殻をかぶったような無表情な様子で座っている姿でした。中には授業中ずっと下を向いたままで、1回も誰とも視線を合わせず、一言の会話もしない女の子の姿がありました。また、一番前で一人だけ手を上げているのに、ついに担任の先生に指してもらえなかったライオン隊のメンバーもいました。もちろん、ライオン隊のすべての子どもがうまくいっていないわけではありません。「とってもこわい先生」と子どもたちが言う担任のもとで、クラスになじんで楽しく学校生活をおくっている様子を見ることもできました。しかし、「うまくいっていない」子どもたちの「うまくいってなさ」があまりにも深く、その出口が全く見えない状況に心ふさぐ思いだったのです。手助けが必要なのに手をさしのべてもらえない、チャンスが必要なのに与えてもらえない。その姿は、病気のライオンが檻の隅でじっとしているようでした。

午後は青森からいらっしゃってくれた「人形劇団クスクス」に人形劇を見せていただきました。バザーから帰ってきた子どもたちを「お帰り！」とスタッフたちは明るく迎えながらも、さっきまで見ていた授業での様子については、スタッフも子どもたちも口にすることはありませんでした。



【福島県富岡町の学校支援】

富岡町の学校再開支援では、顕微鏡3台と電子ピアノ1台を届けてきました。訪問時は、子どもたちはちょうど下校する時間でしたが、前回の訪問時より、子どもたちの身体や表情から硬さがとれ、柔らかくなっているように感じました。そのような印象を学校の先生にお話すると、先生方も同じようなことを感じているとのお話で、「学校を再開してよかったと思います」と話されていた。また、学校再開後、子どもたちも僅かずつ避難先から戻ってきているとのお話もありました。



写真は前回届けた保健室の物資が配置されて、完成した保健室です。最初の訪問の時に見せていただいた工場の隅の薄暗い宿直室の感じはどこにもなく、小さいながらも明るい清潔感あふれる保健室がそこにはありました。こうした保健室ができたことで、震災後、避難先で不登校になってしまっていた子どもが戻ってきて、この場所がきっかけになって登校

できるようになっているというお話もありました。子どもの表情をみるにつけ、不登校になってしまっていた子どもの話を聞くにつけ、日頃あまり感じる事のない「学校」がもっている子どもの居場所としての機能をあらためて感じます。

訪問の前日、ちょうど福島第一原発の2号機で核分裂が生じている可能性があるという報道がなされていました。その話に触れると「東電は町には何の連絡もくれないから…報道を見てようやく知るといことがずっと続いてきた…」と話されていました。そのお話をされている複雑な表情に言葉をかえすこともできませんでしたが、「脱原発」の路線は間違っていないということを確認させる出来事になりました。

万石浦での「大衆演劇」公演寄付（あと少し!!）

「市川富美雄一座」公演へのご寄付をいただいたみなさま、ありがとうございます。必要経費支払い金額まで、「もう少し」というところまで来ました。まだご寄付いただいていないみなさま、是非ご協力ください。

【支援隊活動記録 10月19日～11月7日】

■陸前高田学校支援

- 11月7日（第25回）現地スタッフとの打ち合わせ、地元業者への支払い（山十）、教育支援チーム「まつ」の立ち上げ、小友中学校訪問、広田中学校訪問
- 支援隊メンバー：清水睦美（東京理科大学）、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局）
- 支援物資（現地スタッフによるニーズ把握、地元業者納品、支払）：ニューカー・ガムテープ・ホログラムテープ・OAラベル・白ボール紙・ハロゲンライト・ラミネータ専用フィルム・オセロ・百人一首・しょうぎセット・ポスターカラー（広田小学校）、チョーク・ホワイトボード用ペン・イレイザー（広田中学校）、虫ピン・80円切手200枚（小友中学校）
- 現地ニーズ必要経費（陸前たがだ八起プロジェクト）：ガソリン代・アルバイト代（9月10,360円、10月103,540円）

■石巻市万石浦子ども支援

- 11月5日～6日（第16回）万石浦ライオン学校の11月活動
- 支援隊メンバー：柿本隆夫（引地台中学校）、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）、福島良彦・小沼慶多・高柳恭介・宮澤葵（引地台中学校）、内藤順子（大野原小学校）、保坂克洋（立教大学院生）、村田仁美（和光大学学生）、今井美里・大林沙紀・古浦新司（東京理科大学学生）、有本真紀（立教大学）

■富岡町学校再開支援

- 11月4日（第4回）顕微鏡・電子ピアノ提供
- 支援隊メンバー 家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水睦美（東京理科大学）
- 物資提供：顕微鏡3台、電子ピアノ1台

■ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資・寄付を含む）10/18～11/7

浜野一郎<理科顕微鏡提供>、有本真紀（立教大学）<電子ピアノ>、山田哲也（一橋大学）、藤田武志（日本女子大学）、小林西子（東京理科大学）、佐々木亮（東京理科大学）、清水いく江、堀健志（上越教育大学）、箕形洋子（小学館）、櫻井千夏（歯科衛生士）、浅沼蓉子（Ed.ベンチャー代表）、権田和子（元中学校教諭）

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（Ed.ベンチャーヒガシニホンダイシンサイシエン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

